

藤原定家の書写活動と『大斎院前の御集』

岸 本 理 恵

一、はじめに

藤原定家は生涯に多くの典籍を書写したことが知られている。特に私家集については冒頭を定家が書写し、後を別の人物に書き継がせた写本の存在が以前から確認されていた。昨今、『冷泉家時雨亭叢書』の刊行やその他の各文庫・図書館等に所蔵される資料が多く公開されるようになる中で、私家集の書写においては、全丁を定家が書写するものよりも、定家の関わりが冒頭のみであるとか、あるいはほんの少ししかないものの方が多いということが明らかとなった。これらの写本は定家の監督のもと、家中の子女をはじめとする側近たちに書写させたものであることから、定家監督書写本と呼ばれ、またこうした書写の場を定家の書写工房などと呼ぶ。

本稿で取りあげる『大斎院前の御集』は、そうした私

家集の一つで、内容としては大斎院と称された選子内親王の斎院での様子を記録的に歌で綴ったものである。選子内親王は、村上天皇の第十皇女として生まれ、十二歳から六十八歳までの五十六年間、円融・花山・一条・三条・後一条天皇の五代にわたって賀茂の斎院を勤めた。

この『大斎院前の御集』は当初、一九五七年『弘文荘善本目録第三〇号』に『馬内侍歌日記』として掲載され、これによりその存在が初めて世に知られるところとなった。その後、日本大学図書館の所蔵となり（現在は日本大学総合学術情報センター）、「大斎院前の御集の研究——いはゆる馬内侍歌日記——」（一九六〇年）により、選子内親王を中心とするサロンの和歌を綴ったものであることから『大斎院前の御集』と改称されたのは有名などころである。その後、一九六二年には日本大学図書館から、また一九七三年には笠間影印叢刊として複製本が、

二〇〇二年と二〇〇九年には注釈書も刊行されている^②。

天下の孤本であるために諸本についての研究こそないが、十分に研究されている集と言えるだろう。しかし、多くの論ははまだ定家監督書写本という概念のない頃のものである。よって本稿では、定家の書写活動についての研究が進んだ現在、多くの公開された資料に照らして、定家監督書写本の中に『大斎院前の御集』を位置づけるとともに、定家の書写工房における書写活動の一端を明らかにしたい。

二、『大斎院前の御集』の書誌

『大斎院前の御集』の書誌を、日本大学図書館の複製本^③により示しておく。大きさは、縦一六・二糎、横一五・一糎の枳形列帖装一帖。全四括から成り、うち第一・二括が上巻、第三・四括が下巻である。上下巻の続き方は、上巻末部の本文が第二括の一六丁裏で終了して一七・一八丁の二紙は白紙、第三括も冒頭二紙および三丁表まで白紙、三丁裏の中央に定家筆で「下巻」とあり、四丁表から本文が始まる。外題や内題など書名を示すようなものはない。

本文の筆跡は、複製本解題でも言及のありとおり複数

人のものが認められる。本稿は『大斎院前の御集』から定家の書写工房における活動の一端を見るため特に筆跡に注目しようとするものであり、詳しくは後に論じるが、少なくとも現在刊行されている複製本で確認できる限りにおいても、上下巻それぞれに筆跡の替わる箇所のあることは一見して明らかである。すなわち、次の①～⑤の筆跡が認められる。

- ①上巻第一筆目 三丁表（本文冒頭）～四丁表
- ②上巻第二筆目 四丁裏～四〇丁裏（本文末）
- ③下巻第一筆目 四丁表（本文冒頭）～六丁表
七行目

- ④下巻第二筆目 六丁表八行目～三三丁表九行目

- ⑤下巻第三筆目 三三丁表一〇行目～三九丁裏（本文末）

それぞれの筆跡については諸説次のようにある。まず、『弘文莊善本目錄第三〇号』（一九五七年一〇月）。

筆蹟、上は巻首第一葉の表裏及び第二葉表が藤原定家の自筆^④第二葉裏から、同巻々末までは別の一筆である。下巻は第四十四葉裏の「下巻」と大書した二字、及び巻首二葉（即ち第四十五、六葉）の各表裏、同第三表^⑤（第四十七葉）表の七行目までが定家筆、その第八行以下最終葉までは、別の一筆（上巻の書

継ぎと同筆）である。この書継ぎの体裁は諸事定家筆惠慶集（国宝、前田家尊経閣蔵）と酷似して居て、筆蹟も全く同一である。古くから定家の長女民部卿の局の筆蹟と認められて居る手である。

次に、先にも引用した「大斎院前の御集の研究——いはゆる馬内侍歌日記——」（一九六〇年一〇月）の筆跡についての言及を途中省略しながら必要箇所のみ示すと次のようである。

第一帖のはじめ一丁半（第三丁、第四丁表）は藤原定家と思はれるA筆で謹書されてゐる。（中略）第一帖の第四丁裏から第二帖第十六丁末までの三十六丁半はいはゆる為家風のB筆。（中略）第三帖「下巻」の墨書、本文のはじまる第四丁表より第六丁表七行目まではA筆と同筆と思はれるa筆。（中略）以下第四帖十一丁表の末一行を除くまではB筆と同筆と見られるb筆。（中略）第四帖の第十一丁表の末行（うきくもは…）から最尾の第十七丁まではいはゆる定家流に書かれたC筆。

続いて、日本大学図書館から刊行された複製本の解題（一九六二年三月）では（中略は稿者）、

上巻 第一帖のはじめ一丁半（第三丁裏・第四丁表）は、藤原定家と思はれるa筆。（中略）以下第二帖の第十六丁末までの三十六丁は、いはゆる為家風の

b筆（中略）。

下巻 第三帖第三丁裏の「下巻」の墨書、本文のはじまる第四丁表から第六丁表七行目までは、上巻巻頭のa筆と同筆と思はれるa筆。（中略）a・a'ともに藤原定家の筆跡と思はれる。（中略）以下、第四帖第十一丁表の九行まで（末一行を除く）は、上巻b筆と同筆と考へられるb筆。（中略）第四帖の第十一丁表の末行（うきくもはとくはれにける秋の夜に）から最尾の第十七丁までは、いはゆる定家流に書かれたc筆。（中略）書風は定家に近似するが、その筆とは断定しがたい。むしろ定家以外の模筆と考へる方が安全であるかも知れぬ。

さらに、この複製の約十年後に笠間影印叢刊として出版された複製本の解題（一九七三年四月）では、

本書の書写は複数の人々によって行はれたと考へられる。複数と言つても藤原定家を中心で、指示のもとに、側近のものが書きついだもののやうに思はれる。表示すると、次のごとくである。

- a 上巻第一丁表初行より第二丁表終りまで。
- b 上巻第二丁裏初行より第三十八丁裏の終りまで。

- a' 下巻本文第二丁初行より第三丁表七行まで。
- b' 下巻第三丁表八行より第三十丁表九行まで。

c 下巻第三十丁表十行より第三十六丁裏八行
〈下巻終り〉まで。

これらの筆跡について、「aは定家と推定される」とし、bについては「細手のやはらかな筆致で、字形もやや小さく、いはゆる為家風の筆致である」とする。aについては「aの筆致に較べるとやや筆が走った趣を有し、字形も心もち小字になつてゐる。しかし、bの為家風の字形に較べるとはるかに大形であり、太字である」、bについては「bよりやや大ぶりの字形になつてゐるので、一往bに対してbと表記したが、恐らくは同一人物であらう」と述べる。cについては「aと同一視することは妥当を欠くと思はれる」「定家筆金槐和歌集の書継ぎ者の筆にはなはだ似ている」としている。

右に挙げた各説とも、多少の疑問は含みながらも上下巻ともに冒頭が定家の筆であり、定家から書き継いだ第二筆目の人物について、上下巻ともに同じ人物と見ていえると言える。下巻末の第三筆目（各説にいうC筆またはc筆）については、『弘文荘善本目録第三〇号』はこれに言及がなくそれ以外ではいずれも他の部分とこれを区別している。『弘文荘善本目録第三〇号』以外はいずれも、所蔵者である日本大学図書館および日本大学文学部国文学研究室に所属された秋葉安太郎氏・鈴木知太郎氏・岸上慎二氏によって著されたものであり、多少の研究の



進展や考えの変遷をのぞいては、基本的に同じとみてよいものである。

三、上下巻第二筆目(②④)の筆跡

先に示した論文や解題では『大斎院前の御集』上下巻各々の第二筆目の人物について、「恐らくは」という条件付きのものもあるにせよ同一人物とみなしている。いずれの筆跡も各巻冒頭に比べれば小ぶりで線の細い字であることは確かだが、しかし、一文字ずつを見ると同筆とは認めがたい。

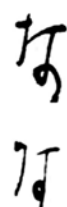
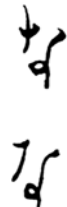
例えば、【図1】に挙げた「の(乃)」は、その特徴をよく示している。上巻第二筆目(②)では字母「乃」でいう一画目、縦画下から上へのハネがはつきりしている。また二画目の横画の入り方がなめらかである。対して下巻第二筆目(④)では一画目に入る際の当たりが大きい。下からのハネはなく、二画目の横画もまた少し当たってから入っている。

【図1】「の（乃）」

④	②
	
6ウ2 12オ4	21ウ3 27ウ11

また、【図2】の「な（奈）」の場合、右上の点から下へとつながる線が、②ではどちらか緩やかな曲線で左下へつながるのに対し、④では直線的でどちらかというと直下の方向へ下りている点異なる。このように、印象としては似通って見える②と④は明らかに別筆である。

【図2】「な（奈）」

④	②
	
25ウ10 27オ3	13ウ10 17ウ3

さらに、②と④にはそれぞれ同筆資料を確認することができる。まず、②の同筆資料は次の三つの私家集がある。

『兼澄集』⁵（冷泉家時雨亭文庫蔵）

外題はおそらく定家筆。内題と所々の重ね書きによる訂正も定家。本文は一丁表のみ定家、以下は②の筆跡。

『藤六集』⁶（冷泉家時雨亭文庫蔵）

外題および勘物や重ね書きによる訂正の筆は定家、内題もおそらく定家。本文は②の筆跡。

『六条修理大夫集』⁷（冷泉家時雨亭文庫蔵）

外題と本文冒頭二丁裏途中まで定家の筆。後を②の筆跡が引き継ぐ。所々の加筆訂正にも定家筆あり。

特徴的な字を【図3】に示した。先に述べた「の（乃）」の特徴が共通するほか、「人」の字においても一画目の角度や二画目へのつながり、またその伸び方が共通している。

【図3】

大斎院前上② 10才7 21ウ3 27ウ11	六条修理 10才4 26才6 62才8	藤六集 1ウ2 7才1	兼澄集 2才8 3才11 6ウ7	大斎院前上② 27ウ7 31ウ1	六条修理 10ウ2 36ウ8	藤六集 7ウ3 8才3	兼澄集 2才4 6才5 17ウ3

【図4】

大斎院前下④ 6ウ2 12才4	有房中将 4ウ5 13才6	主殿集 26ウ5 53才3	大斎院前下④ 12才8 19ウ3	有房中将 82才2 93才4	主殿集 53才5	

次に、④の同筆資料は次の二つの私家集がある。

『主殿集』⁽⁸⁾ (冷泉家時雨亭文庫蔵)

外題と本文の書き入れは定家筆、内題はおそらく別筆と思われる。本文は冒頭一丁のみ定家、後を④の筆跡が書き継ぐ。

『有房中将集』^⑨（冷泉家時雨亭文庫蔵）

外題は定家風。本文は冒頭から三丁裏までと、六九丁表最終行から七三丁裏までは⑤、他は④の筆跡。

【図4】はその特徴的な文字を一覧にしたものである。先ほどと同じく「の（乃）」の特徴が共通している。また、「おもふ（ひ）」では、「お」の最終画がくるりと輪を描いて「も」へと下りていく点に特徴がある。

以上のように、②と④は定家監督書写本の中にそれぞれ同筆資料を確認することができる。したがって、②と④はともに定家工房において定家の書写を助けた別の人物であるということになる。

四、下巻第三筆（⑤）の同筆資料

『大斎院前の御集』下巻の巻末部分の筆跡⑤については、先に見た論において④と区別しているように明らかに別筆であり、②④に比べると①③の定家に似通う印象はあるかもしれないが、定家とは異なる筆である。というのも、定家の筆跡に比較してみれば勢いや線の太さにおいて異なるからである。さらに、定家が冒頭を書写した後を側近が書き継ぐ私家集は多く確認されているが、

そうした写本に見える側近の筆跡の中に⑤と同筆のものが認められるのである。⑤の筆跡は現在複製本や影印本が公開される定家監督書写本私家集に見る側近筆のうち、管見に入った限りにおいて最も多い筆である。先に引用した『大斎院前の御集』笠間影印叢刊の解題において指摘されるように、定家が冒頭を書写した『金槐和歌集』をはじめ、以下に挙げる私家集にこの筆跡が認められる。

『秋篠月清集』^⑩（天理大学附属図書館蔵）

内題「式部史生秋篠月清集上」「式部史生秋篠月清集下」「百首愚草」等、目次や部立、詞書のうち漢字の多いものは定家の筆。その他は⑤の筆跡。上巻の奥には定家の筆で安貞二年の書写奥書。

『伊勢集』^⑪（天理大学附属図書館蔵）

外題と本文冒頭一面分は定家筆。以下の本文は⑤の筆跡。定家が本文を重ね書きして訂正した箇所あり。

『千頼集』^⑫（穂久邇文庫蔵）

本文冒頭「千頼集序」から二丁にわたり漢文で書かれた序文は定家の筆。「春十一」「心細十首」の部立は定家筆。和歌本文は⑤の筆跡。

『檜垣嬭集』⁽¹³⁾ (穂久邇文庫蔵)

内題「檜垣嬭集」は定家筆。本文は全丁⑤の筆跡。定家の訂正あり。

『是則集』⁽¹⁴⁾ (大阪青山歴史文学博物館蔵)

題簽「是則集」は定家筆。内題「これのり」はおそろく定家。本文は冒頭から⑤の筆跡。五丁裏の「恋部」は定家筆。

『興風集』⁽¹⁵⁾ (大阪青山歴史文学博物館蔵)

外題「興風集」は定家、内題「おきかせ」は別筆。本文は冒頭一行目のみ定家、以下は⑤の筆跡。

『金槐和歌集』⁽¹⁶⁾

外題と奥書は定家。大方の本文は⑤の筆跡。「春」「夏」等の部立や、詞書で特に漢字の多い部分は定家筆。

『公忠朝臣集』⁽¹⁷⁾ (大東急記念文庫蔵)

外題「公忠朝臣集」は定家風。内題は別筆。本文は全丁⑤の筆跡。

ここに挙げたうち、『秋篠月清集』『伊勢集』『千類集』『興風集』『金槐和歌集』は定家と⑤の人物とが共同で本文を書写している。ここに挙げた以外の私家集やその他

にも古筆切・歌学関連書などこの筆跡の資料は多く現存する。⑤の人物は、『大斎院前の御集』での分担当は少ないながら、定家の書写工房では重要な役割を担っていた人物であったと言えるよう。

さらに注目すべきは、この⑤の同筆資料の中に『秋篠月清集』が含まれることである。これは定家と⑤の人物による書写であるだけでなく、定家の私家集には珍しく次の奥書がある。

是御平生之時、所被注置之本也、夢後書留之、粗一見了、御本忽返上之間、不見中書之草字誤、無極不晴覚事、不能直付

安貞二年五月二日

つまり、この『秋篠月清集』が安貞二年(一二二八年)の書写ということは、同じ二人を含む人々によって書写された『大斎院前の御集』の書写年次もまたこの年からあまり遠くない頃であると考えることができよう。

五、おわりに

以上『大斎院前の御集』に見える筆跡のうち、②と④は別筆であること、また②④⑤それぞれの同筆資料が定家監督書写本の中に複数見出すことができることについ

て確認した。こうして見ると、『大斎院前の御集』が他の多くの私家集とともに定家の書写工房の中で書写されたものであるということがより明確となる。安貞二年からあまり遠くない時期、これは定家晩年にあたり、積極的に書写活動を行っていたと考えられる頃であるが、そうした活動の中で、複数の人物を動員して書写されたものが『大斎院前の御集』である。

そして、現在公開されている他の定家監督書写本私家集とこれを比較してみると、『大斎院前の御集』が書写された状況について新たな推測ができるようになる。その推測を以下に示しておきたい。

私家集において冒頭を定家が書写し側近がその後を書き継ぐものは多く見られるが、途中の巻ごとに再び定家が巻頭を書写して後を側近に書写させるという例はあまりない。例えば、『散木奇歌集』は丁数にして三〇〇丁を超え、内容は部立ごとで巻に分かれているが、巻一の冒頭を定家が書写した後はわずかな書き込み等を除き全て側近の筆である。『金槐和歌集』でも、やはり冒頭の定家による部分の後は、部立名や詞書などの一行単位で定家が書写している部分もあるものの、基本的に本文は全て⑤と同じ側近の筆跡によって書写されている。

また、定家監督書写本による私家集において、上下巻に分割するものは少なく、『大斎院前の御集』とほぼ同

じ丁数からなる『相模集』においても全八二丁の途中に切れ目はない。『六条修理大夫集』では全一〇九丁あるが、やはり巻を分けることはせず、冒頭の二丁程度を定家が書写した後は最後まで側近の筆である¹⁾。

したがって、『大斎院前の御集』が上巻と下巻に分かれているのは他に比べてやや異質と言える。現在は上下巻を合綴して一帖となっているものの、冒頭で書誌を示したように上巻二括・下巻二括となっており、上巻末部分と下巻冒頭部分にはそれぞれ白紙がある。これは別々の帖に仕立てられていた場合の遊紙とも見ることができるものである。

定家監督書写本の中には唯一、『恵慶集』だけがこれに似た状況にある。冷泉家時雨亭文庫蔵『恵慶集』と中村記念美術館蔵『恵慶集』があり、現在はこの二帖を上下巻として読まれるものである。それぞれに冒頭を定家が書写、その後を別の側近が書き継ぐ。中村記念美術館蔵『恵慶集』には扉裏に、他に上巻に当たる部分のある旨を定家が書き付け、それを後から削除する記号が付けられている。ここに言う上巻にあたる部分とは冷泉家時雨亭文庫蔵『恵慶集』のことで、定家がこれを入手・書写した段階でこの書き付けを削除したらしい。つまりこの『恵慶集』は上下巻において入手・書写の時期に差があり、その結果、上下巻が別々の帖に仕立てられ、それ

それに冒頭を定家、後を側近が書き継ぐ写本となって現在に残っている。

『大斎院前の御集』においても同じように、上下巻で入手・書写の時期に何らかの差があったのではないかという推測がされるのである。その後、『惠慶集』のように別々に所蔵されるのではなく、一帖に合綴されて今に至っているのではないか。『惠慶集』のような書き付けはないのではっきりとしたことはわからない。しかし、複数の側近を用いて精力的に書写を行っていたことに加え、定家が私家集を探し求めて書写をしていたその一端がここにもうかがえると見えよう。

(注)

- (1) 秋葉安太郎・鈴木知太郎・岸上慎二「大斎院前の御集の研究―いはゆる馬内侍歌日記―」（『日本大学創立七十周年記念論文集第一巻人文学編』一九六〇年一〇月）
- (2) 石井文夫・杉谷寿郎『大斎院前の御集注釈』（貴重本刊行会・二〇〇二年）、天野紀代子・園明美・山崎和子『大斎院前の御集全釈』（風間書房・二〇〇九年）

- (3) 日本大学図書館編、一九六二年。
- (4) 笠間影印叢刊四四『大斎院前の御集 日本大学図書館蔵』（一九七三年・笠間書院）。解題は鈴木知太郎氏・岸上慎二氏の編による。
- (5) 冷泉家時雨亭叢書十七『平安私家集四』（朝日新聞社・一九九六年）
- (6) 冷泉家時雨亭叢書十七『平安私家集四』（朝日新聞社・一九九六年）
- (7) 冷泉家時雨亭叢書十八『平安私家集五』（朝日新聞社・一九九七年）
- (8) 冷泉家時雨亭叢書十九『平安私家集六』（朝日新聞社・一九九九年）
- (9) 冷泉家時雨亭叢書二十七『中世私家集三』（朝日新聞社・一九九八年）
- (10) 天理図書館善本叢書 和書之部三十六『秋篠月清集』（八木書店・一九七七年）
- (11) 天理図書館善本叢書 和書之部四『平安諸歌集』（八木書店・一九八二年）
- (12) 日本古典文学影印叢刊八『平安私家集』（日本古典文学会・一九七九年）
- (13) 日本古典文学影印叢刊八『平安私家集』（日本古典文学会・一九七九年）
- (14) 古谷稔「新出の定家本は則集」（『MUSEUM 東京国

立博物館美術誌」二七六・一九七四年三月)

(15) 複製日本古典文学館・一九七七八年

(16) 岩波書店・一九三〇年

(17) 大東急記念文庫善本創刊 中古中世篇『和歌三』(汲

古書院・二〇〇三年)

(18) 定家監督書写本の私家集では、側近筆の部分の途中、部立名や詞書などを一行だけ定家が書く場合が複数見出される。特に⑤の筆跡の人物の書写部分に多いようで、こうした例は漢字の多い部分に特に多く見られるが、その理由の詳細は明らかでない。冒頭の数丁を定家が書写した後を側近が書き継ぐ書写の分担とは少し区別して考えるべきであろう。

(19) 例外的に『秋篠月清集』は、上巻冒頭に「式部吏生秋篠月清集上」とあり、途中五二丁表六行目で上巻本文を終え、残り三行分程度を空白とする。しかし同じ五二丁の裏には一行目に定家筆で「式部吏生秋篠月清集下」と記し、一首目の詞書のみ定家筆、歌からは上巻と同じ側近筆である。上下巻を分かち、下巻冒頭を定家が書くという点では『大斎院前の御集』に似通うが、上巻終了後の同じ丁の裏面に、続けて下巻を書く点は大きく異なる。また、注(18)にも述べたような、詞書を定家、歌を側近が書写した部分が全巻を通して多いのが、『秋篠月清集』の

特徴であり、『大斎院前の御集』とは分担の方法も異なる。

(20) 冷泉家時雨亭叢書十七『平安私家集四』(朝日新聞社・一九九六年)

(21) 尊経閣叢刊『惠慶集』(育徳財団・一九三五年)

(22) この経緯については、冷泉家時雨亭叢書十七『平安私家集四』に収録された『惠慶集』の田中登氏による解題に詳しい。

〔付記〕

本稿は、科学研究費補助金(研究活動スタート支援)「藤原定家の書写工房における古典籍の書写に関する研究」(22820050)における研究成果の一部である。

—きしもと・りえ 尾道大学日本文学科講師—